

〈耕論〉中国とのつき合い方：多彩な交流で新「棚上げ論」を

石川好さん＝作家

朝日新聞 2012年11月1日

日本の漫画家や作家らが戦争体験を絵などで記録する「八月十五日の会」というのがあります。縁があつて南京の南京大虐殺記念館で終戦日の記憶を描いた絵や文章を展示することになり、2009年8月に漫画家のちばてつやさんらと訪れました。

すると「日本の庶民も戦争で悲惨な体験をしたんだな」と共感を呼びました。絵を見て泣いている人もいたほどです。共産党も「中国人民だけでなく日本の民衆も、一部の軍国主義者の犠牲になった」という考え方に立っていますから。展示は11カ月続くロングランとなり、240万人もの中国人が訪れました。記念切手まで発行され、各地からオファーが相次いで北京、瀋陽、今年7月には旧満州の長春の抗日記念館でも実施しました。

■疑心暗鬼の中国

そうした活動を通じ、党幹部とも知り合い、本音で話し合えるようになりました。

この10月中旬にも中国に行ってきました。対日姿勢は想像以上に深刻で、国交正常化以降の40年間で最悪だと感じました。テレビでコメンテーターが「抗日戦争は終わっていない」とか「国交正常化は成立していない」「日清戦争の恨みを晴らせ」とまで発言している。中国のメディアは共産党の管理下にありますから、党も容認しているということです。

私は、日中国交正常化40周年記念実行委員会の企画委員長を務めていますが、自治体など様々な団体から500件以上のイベントの申請があり、うち約370件が採用され、今年4月から実施されてきました。しかし、8月ごろから急に中国側から中止の申し入れが相次ぎ、フィナーレになるはずだった11月のAKB48の北京・工人体育館公演も困難になりました。

尖閣諸島の問題は、国交正常化交渉の中で田中角栄首相が「どう思うか」と尋ね、周恩来首相が「やめておきましょう」と棚上げにしました。トン小平（トンは登におおごと、トンシアオピン）氏も踏襲したことで、日中間では、この問題には踏み込まないという「暗黙の了解」ができていたのです。

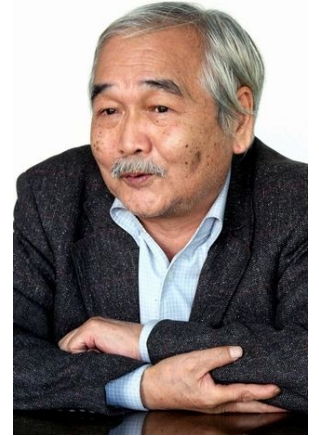
それが破られたのが、2年前の中国漁船衝突事件でした。小泉政権当時も中国人が不法上陸する事件がありましたが、直ちに国外退去させました。ところが民主党政権は船長を逮捕した上で不起訴処分とし、中国側は日本が「暗黙の了解」を破ったと受け止めました。国内法にのっとりた処分をすることは、尖閣に日本の法の支配を及ぼすことになるからです。

引き続いて今回の国有化です。次は棧橋などの建設、自衛隊の常駐などに進むのではないかと中国側は疑心暗鬼になっています。現政権は「やらない」と言っているけど、政権が変わればどうなるかわからないと。

■尖閣も議論せよ

尖閣問題は「棚上げ論」まで戻すしかないと思います。両国とも政治的リスクが伴いますから、かつての田中、周両首相に匹敵するような勇気あるカリスマ的政治家がいなければできません。ただ残念ながら、そうした政治家は日本にも中国にも見当たりません。

では、どうすればいいか。次の国家主席になる習近平氏が最近、「尖閣だけが日中関係ではない。尖閣は外交問題に過ぎな



松本敏之撮影

い」と発言しています。外交問題だから話し合いで解決しようというメッセージです。日本政府は「領土問題は存在しない」と交渉を拒否していますが、外交交渉のテーブルに乗せた上で日本の立場を主張しつつ論破すればいいと思います。

交渉は役人や大臣に任せきりにせず、文化、経済、スポーツなど様々なレベルで人と人のパイプを作って話し合えばいい。そうした多くのチャンネルの議論を通じて新しい「棚上げ論」を作り出すべきです。政府間の関係がいかに冷え切っても、民間レベルの交流を続けていくべきなのです。

習体制の共産党にとって、難題は国家統治の正当性をどう人民に納得させるかです。毛沢東など革命第1世代は、外国を追い払って建国した功績があります。トン小平以降の指導部は中国を世界2位の経済大国にしました。では、これからの共産党は何によって選挙なしでの統治の正当性を主張するのか。この大テーマに比べれば、尖閣問題は幾多の課題の一つにすぎません。粘り強い交流と話し合いにより解決の糸口は見つけられるはず。軍事衝突で得する国はありません。(聞き手・山口栄二)



いしかわ・よしみ

47年生まれ。兄がいた米国のイチゴ農園で働いた体験を書いた「ストロベリー・ロード」で大宅壮一ノンフィクション賞。著書に「中国という難問」など。